

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 61, 2021. 12

\*\*\*\*\*

REFLECTIONS わが半生を振り返って -----	Robert Kluttz (伊豆洋一 訳)	1
クルツさん紹介 -----	編集委員会	3
クルツ先生と自転車 -----	加藤 康子	3
コロナ禍(下)での活動報告 -----	福澄 孝博	4

## 特別寄稿

### REFLECTIONS わが半生を振り返って

翻訳ボランティア Robert Kluttz  
 翻訳：伊豆洋一

When I first came to Japan in 1946, I did not realize that God the Creator had fashioned the dear Japanese as equals – and equally loved – as also with the rest of humanity. Somebody gave me a Bible, and I began reading it sincerely and voraciously for the first time ever. It changed my whole concept of life, of mankind, and of our existence and purpose on earth.

I was assigned to a Quonset hut in Yamashita Park and witnessed THE HORRORS OF WAR in rubble left from the wartime bombings. “WAR IS HELL!” I thought. “How good if the whole world could live in peace, love, and harmony instead of endless bickering, greed, hatred, killings, AND WARS!” These nebulous and vain thoughts tormented me because of my ignorance of THE REAL PROBLEM (Jer 17.9 & Rom 3.10-23 q.v.). The study of World History in college soon made me realize that “Peace” is merely a fleeting mirage between never-ending WARS, and will occur ONLY by means of a radical regeneration in human nature at the Hand of God the Creator.

At the end of 1947 I returned to the homeland to work and study in preparation for a life of teaching. At the university I majored in English Education, the Humanities, plus “History and the Bible”. How DELIGHTFUL!

1946年、私は初めて日本の地に降り立った。その時、創造主なる神が日本人を他の民族と同等に、そして等しく愛される存在として造られたとは思っていなかった。しかし、ある人から聖書を手渡され、初めて聖書を心から真剣に読み始めた。すると、それまで私の中にあった人生観、人間観、そして、私たちの存在意義と人生の目的に関する概念は完全に変わってしまった。

山下公園に設営されたかまぼこ兵舎に配属されると、戦時中の爆撃による瓦礫を目の当たりにし、戦争の悲惨さに心を痛めた。私は思った。「戦争は地獄だ！延々と続く争い、貪欲、憎しみ、殺人・・・そして戦争。そうではなく、世界中の人が平和と愛と調和に生きることができたら何と素晴らしいことだろう」。しかしこういった漠然とした虚しい考えは私をひどく苦しめた。それは私が真の問題を悟っていなかったからだ（エレミヤ書 17.9 & ローマ書 3.10-23）。大学で世界史を学んで悟ったことは、いわゆる「平和」とは繰り返す戦争と戦争の間に現れる束の間の蜃気楼のようなものであり、真の平和を達成する唯一の方法は、創造者なる神の御手によって人の性質が根本的に新しくされることだ。

翌年帰国し、生涯を教育に捧げるために働きながら勉強を始めた。大学では英語教育と人文学を専攻し、世界史と聖書を照らし合わせながら学ん

But through all the years of academia, I could not forget my dearest friends in Japan!

The year 1953 found me in Karuizawa's "Japanese Language Institute". It was here that I first heard the name "Dr. William S. Clark" of the Sapporo Agricultural College. His noble effort to help Japan and the Japanese 77 years earlier captured my attention, and I began reading everything I could find about this great and good man. Not only had he lectured on agricultural subjects, but he had also used the Bible to teach his students the English language. This example I was eager to emulate.

During the next decade Hokkaido became my home, where I lived and worked in various towns and villages. At every new location I made it a point to call on institutions of learning, offering English help whenever needed and by any means possible. When I arrived in Wakkanai, I met the most beautiful girl in all the world. Her name was Ritsu Endo. We were married November 11, 1961, and lived in Asahikawa for the next two years. Then came a brief respite to the homeland (with wife and new baby), after which we settled in Sapporo from 1966 – never to roam again.

Living close by the University Campus allowed me to come in contact daily with students eager to learn English, many of whom were memorizing long passages of Elizabethan English and Shakespearean drama. They requested that I help with interpretation, and serve as "judge" at recitation contests. Eventually, this led to a permanent teaching position at the University for the next 25 years, per kind favor of a very dear friend --- Dr. Yoichi Kitaichi.

Hokkaido has been our domicile for most of my life, and I do not plan to exit "until death do us part." Our precious Japanese friends have been so kind, understanding, and helpful through all these years, and I wish to say THANK YOU from the bottom of my heart! I love you, and pray God's continuing blessing, peace, prosperity, protection, and freedom for Japan, and for ALL of THE BELOVED JAPANESE.

だ。その喜びは計り知れないほどだったが、学問に没頭する日々にあっても、愛する日本の友人達を忘れることができなかった。

1953年に再来日し、軽井沢の日本語学校で学び始めた。そこで初めて札幌農学校の「ウィリアム S. クラーク博士」のことを耳にした。77年前の博士による日本国、そして日本人を支援する崇高な取り組みは私の興味を引き、私はこの素晴らしい人物について入手できる限りの文献に目を通した。博士は農学の講義だけではなく、聖書を用いて英語を学生に教授したことを知った。私は博士を模範とすることにした。

その後の10年間、北海道は私の家となった。多くの町や村に移り住んでは仕事に従事した。新しい土地に着くと、決まってその地域の教育機関に連絡を取り、形態にかかわらず必要に応じて英語のお手伝いを申し出た。稚内に到着してある日のこと、私は世界で最も美しい女性に出会った。その人の名は、遠藤リツ。私たちは1961年11月11日結婚式を挙げ、2年間ほど旭川に住んだ。その後、妻と生まれたばかりの娘を連れて一時帰国し、1966年に札幌に居を構えて現在に至る。

北大キャンパスの近くに住むことで、英語を学びたい学生達と毎日のように会うことができた。彼らの多くはエリザベス朝時代の著作やシェークスピア劇の長い一節を暗唱していた。私はその解釈の手伝いを依頼され、暗唱コンテストの「審査員」を務めることもあった。このような経緯から、その後25年間にわたって大学で教育に携わることとなったのだが、それは私の愛する友、北市陽一博士のおかげでもあった。

北海道は生涯の長きにわたって私の家となった。そして私は「死が我らを分かたずまで」この地を離れるつもりはない。かけがえのない日本の友人達は長年にわたり、親切で、理解を示し、助けてくれた。よって私はここに心からお礼を申し上げます。私は皆さんを愛しています。そして創造主なる神が、日本と私の愛する日本人の皆様に祝福を、平和と繁栄、そして庇護と自由をこれからも与えてくださいますよう心よりお祈り申し上げます。

(翻訳：伊豆洋一, PhD)

## クルツさん紹介

クルツ先生は長年、北大総合博物館の翻訳ボランティアとして活躍されています。1階の展示においても来館者の理解を進めるために貢献されました。どのような理由で日本に永住されるようになったのかをお伺いしたいと思い、今年春、雪道を加藤康子さんと共にお住まいをお訪ねし、執筆頂くことが可能となりました。感謝申し上げます。(編集長：星野フサ)

クルツ先生、お元気そうでなによりです。当時、資料部研究員の先生には考古学展示の作成でお世話になりました。考古学用語や文章表現についてずいぶん議論しました。おかげで完全な和英併記を実現できました。また先生が毎年クラーク会館で開かれているクリスマス会も、留学生たちと交流できて楽しみです。

そうそう、先生一家が永年住み慣れた家からマンションに移る時に年代物の鋳物製石炭ストーブをいただきました。思い出です。戦後北大に復職した宮澤・レーン事件のレーン先生との交流など、うかがいたいことがまだ沢山あります。(資料部研究員：天野哲也先生メールより)

### 活動報告

## クルツ先生と自転車

植物ボランティア 加藤 康子

なんて楽しい方！ お話はユーモアたっぷり、聞きとれない単語はスペルを教えてください、シェイクスピアの一節も飛び出します。さすが、クルツ先生は英語の先生です。

大正15(1926)年生まれ。ご出身はアメリカ南部ノースカロライナで、ルーツはドイツ中西部とか。お元気でかくしゃく豊饒という言葉がぴったりです。でも、足が弱くなって博物館になかなか行けないと嘆くことしきり。「でも自転車なら行けるよ」。

初めてお目にかかったのはまだ道に雪が残る早春のことでした。その後、コロナ禍はおさまらず、博物館ボランティアの活動もままならない状態になってしまいました。

ボランティア活動が再開された10月のある日、星野さんがクルツ先生に原稿を依頼したことを知り、私からもメールを出してみました。

返信を読んでビックリ。クルツ先生、8月に転んで腕と膝に怪我を負い、まだ治療中で歩くのもままならないというのです。お住まいのマンション1階のミーティングルームならお嬢さんの付き添いで降りて行けるので会いに来てくれませんかという内容でした。早速、星野さんと伺いました。お会いして、お元気そうなクルツ先生のご様子に

安堵しました。そして相変わらずお話が楽しい！

しかし、転んだ理由を聞いて唖然。なんと先生はマンションの前で自転車に乗る練習をしていて転んでしまったのです。練習をしていたのは博物館に自転車で来たかったからに違いありません。

先生はまだまだ、ボランティアやる気満々です。最近いただいたメールにこう書かれていました。  
Please don't forget that this old geezer is willing to assist with English matters in any way possible --- health matters and life permitting. Sorry that I cannot help, however, post-mortem!

是非また博物館にいらしていただきたいものです。でも、自転車はダメですよ、クルツ先生。

Then



北大の教師時代(左)

Now (with daughter)



原稿を受け取った時、お嬢様と

活動報告

コロナ禍(下)での活動報告

宇宙4Dシアター 福澄孝博

新型コロナウイルス感染症により、皆で集まったのボランティア活動はなかなか難しく他グループの皆様もそれぞれに苦労されていることと存じます。

実際、私ども「宇宙の4Dシアター(以下4D)」でも、結局昨年度はお客様を集めての公演は一度もかないませんでした。しかし、そんな中でもいくつかの活動実績を残せましたので、その中からふたつ、皆さまにご紹介したいと思います。

① Mitaka オンラインワークショップに参加

9月20日、日本天文教育普及研究会 Mitaka ワーキンググループ主催の研修に有志メンバーのお子さんも含め6人で参加しました。Mitakaは4Dでも使っている国立天文台開発のフリーソフトです。当日は開発者加藤恒彦氏の新機能紹介を主とした講演の後、スキル段階ごとのグループワークにのぞみました。4Dでは初心者クラス相当の者がほとんどですが、私が同クラスの導入部分にあたる事前講習(こちらはほぼ全員参加)を行い、准上級者クラスで課題に取り組みました。各人が操作の流れを記録・保存し自動実行する演習・簡単な番組制作までをこなし成果発表もできました。

この経験を活かし、公演活動再開後にはより良い番組提供ができるよう、精進していきます。

② ほくでん「おもしろ実験室」講師担当

“科学であそぼ「おもしろ実験室」”は小中学生が直接体験[実験・工作]を通し楽しみながら科学に親しむ施設です(JR沿いの黄色い顔のある建物を見た方も多いのでは)。その担当者さんから山本順司先生に「子ども達の希望が多い宇宙につき“1日教室”ができないか」と打診があり、4D

有志(福澄・増田)で対応し、7月25日に実施。「星と友達になろう～夜空の星のヒミツを探る～」と題し星の一生を扱い、「子ども達の発想・発言を尊重」、「明らかに意図と違う答えが出てても否定せずそこから何かを引き出す」に深く留意しました。

まずは参加者(小3・4)に知っている星の名前をアイスブレイク的に次々挙げてもらいました。出た名前を仲間分けし恒星[自分で光る星]を導き出します。仲間分けの基準(例:大きい・小さい、沢山の星・1つだけの星、等々)も子どもたちの提案です。そして、いよいよ恒星の一生です。

HR図という図を使うと、星の一生の流れ・個々の星の進化段階がわかるのですが、何ができるかは明かすことなく「ゲーム感覚」でこれを工作し、理解につなげました。最後に「一家に一枚周期表」を配布、「みんなは星のカケラでできている」「星のカケラからできた君たちは、宇宙と同じく無限のパワーと可能性を持っているよ」と伝えました。作った工作とお土産に配った札幌仕様星座早見盤を大事そうに抱え、うれしそうに帰る子どもたちが印象的でした。



おもしろ実験室にて：完成したHR図を手に

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 61

- ◆編集人：北海道大学総合博物館 ボランティアの会 (編集委員：星野、今井、大山、須藤 久末、山岸)
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2021年12月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>